

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 アンドレ・ジイド 『狭き門』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 68 回のツイキャス読書会の課題図書は、アンドレ・ジイド 『狭き門』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「狭き門」感想文

アンドレ・ジイドの「狭き門」を初めて読んだ。本作にはジェロームとアリサの二人の最終的には成就しない恋愛が描かれている。二人は相思相愛であるが、二人の間にはキリスト教の神が介在するが故にお互いに少しずつすれ違っていく。

ジェロームは他の女性には目もくれず一途にアリサを愛しているが、アリサは初めから控えめというか、一步引いたところで二人の関係を見ている。それはアリサが両親の関係を近くで見てきたからなのかもしれない。

アリサは次第に現実の世界よりも神との関係を重視するようになる。それに伴ってジェロームとの関係は神との関係よりも下位に置かれることになり、二人の関係がぎくしゃくしたものとなっていく。また、アリサ自身も少しずつ精神とともに肉体を蝕まれていき、最後には死に至る。

現代で考えると、例えば娘の病気の快復を願って宗教団体に入信した母親が宗教にのめり込むことで家庭が崩壊していくといった話に似ているように思う。あるいはスポーツ競技でレベルアップするために始めた筋トレがいつの間にか競技そのものよりも大事になるといったことを連想してしまう。

キリスト教を含めた宗教はそもそも辛い現世を生き抜くために生まれたものだと私は考えているが、人間はいつの時代もそのように目的をいつの間にか見失い、倒錯的になりがちなのだろう。

作中で登場人物たちの台詞に引用される福音書や戯曲、文学作品の言葉がいまいちピンとこないため、引用を一つひとつめくりながらのぎこちない読みになった。

(おわり)

「愛と自由」

私は男性としてジェロームに腹が立ちました。お前が好きなのはアリサではなくアリサが好きな自分だろう！ 恋の悩みを恋愛マスターアベルに相談し、アリサの気も知らず駆け引きを試みたり！ ジュリエットの事も見てやれよ！

と、かつての独りよがりのオナニー野郎の自分が思い出され、正直自分が情けない気持ちになりました。なぜならジェロームはアリサだけを愛し通したから。

それはアリサも同じこと。彼女の日記から自分がわざと嫌われるような言動をして、ジェロームに幸福になってもらいたいという気持ちが痛い程伝わって来ました。

ジェロームとアリサの 2 人がジュリエットのように好きでもない人と、または封建的に親や周囲の人の勧めた相手と一緒にいたらこんなに苦しまずに済んだ気もします。確かツアラトウストラの言う処世術に「騙されろ」と言ったものもありましたよね？

でもそうすると今度は自分で好きになった人を自由に愛する事は出来ないのか？ 自由とは何か？ 自分とは一体何者か？ という問題にぶち当たりました。

答えは導き出せていませんが、心の中は自由だ。という事はひとつ言えると思います。

俗物の私から見たアリサは心の中の信仰と俗世をごちゃ混ぜにし過ぎた感があります。でもアリサは神を通して自分を強く持っていた。

作中に出てくる福音書や詩のフレーズが難しかったけれど、まんまと？ 作品に引き込まれました。

ジェロームの事を忘れる目的があるにせよ、資材を投げ売り貧しい人を救う為にそのお金を使い、自分は聖書だけを持ち療養所で最期を迎えたアリサみたいな人をキリスト者と言うのでしょうか。

アリサに心の中で百合の花を捧げます。

(おわり)

「杣道(そまみち)に迷いて迷わぬ恋」

ハイデッカーについて話す友人から、こんなことを聞いたことがある。「杣(Holz)とは、森の古い呼び名である。杣には多くの道があり、大抵は草木に覆われ、行き止まりのところで突如終わってしまう。それらは杣道と呼ばれている。

どの道も別々に伸びているが、同じ森の中である。杣道には杣人という森に精通した人がいる。もしくは森番がいて、彼らは道に迷わない。道は迷いの中を進む。しかし、道は決して迷わない」と。

こんなことが、可能なのだ。

杣道をゆくのはアリサである。彼女は、恋愛を通して神を見ようとし、神を仰ぎながら生きようとした。

ジェロームに愛されつつ純粋なまま、満足までは至らないという恋愛が、彼女を幸福にする。至高の愛ではなかろうか。

私などが、とても良く分かる、分かりたいと言ってしまったら、アリサに怒られるだろう。無論、信仰を持たない私には彼女とは世界が違うのだろう。けれど、私が心のどこかで憧れる恋愛の形はこれに似たものであると感じる。幸福は魂とともにあり。

「幸福に先立つ瞬間に歩みを止めて、今こそ恐らくいちばん楽しい瞬間だ、幸福そのものだ」(p129)

彼女はこの世の恋愛というものが儚く、有限な営みであり、儘ならないことを、神を覲るにつけ知っていったと思う。

信仰とはそういう儚さを永遠に変えてくれる救いではなかろうか。俗世間には迷いが多く、それは杣道のように、森は深く暗く鬱蒼とし、道なき道。迷い歩くほどに疲労し、袖は露に濡れるのだ。

だから、彼女は決して迷わない森の番人(神)が導く道歩んだのだ。賢明だと思う。迷い、流されるように見えながら、ここぞと思う相手を選びとる直感を持ち、この世の幸せを満足させるよりむしろ、自らの神(テーマ)を優先し、そこに一身を捧げて、そして献身的な恋愛のただ中に死んだということだ。

「道は迷いの中を進む。しかし決して迷わない」『杣道』(ハイデッカー)

(おわり)

「アリサの無意識」

粗筋は、アリサという敬虔なキリスト教徒が自己犠牲の教えに従って、愛する人との現世の幸福を選ばずに、天上の徳に到達することへの幸福を選び、死ぬまで貫いたという話を中心になっています。そして、もう一人の主人公のジェロームもアリサの生き方を崇拝して生きていく話です。

私は、「なぜ二人は結婚しなかったのか？」また「アリサとジェロームのどちらがより敬虔なプロテスタントなのか」が気になりました。キリスト教徒でも結婚はできるはずですが、でも、アリサは結婚を恐れていたようです。文中にはアリサが、何度もジェロームに自分が信じている天上の徳の教えを破るように願う箇所が書かれています。このことから、アリサが彼との結婚を拒んだ理由は、性にだらしのない母への嫌悪感と心の逃避であることが想像できます。その本心に抵抗し、教えにすぎる彼女ですが、ジェロームへの愛が増すにつれ、教えを破りたいと思うけれど、どうしても自分の方からは踏み出せずに苦しむ所を読んだ時は、私はアリサをととても憐れに思いました。彼女はジェロームに現実の世界の方に無理やりでも引っ張って行って欲しかったのではないのでしょうか。でも実行してくれないのが分かり、一度吹き出しそうになった無意識の本心も自然消滅してしまい、結局アリサは神への道を選ぶしかなかったのだと思います。

では「なぜ、ジェロームは強引に結婚しなかったのか？」ですが、彼はアリサの心の逃避という本当の理由を知らなかったため、アリサが真のキリスト教徒であると信じ込み、敬虔さを尊敬し、愛してしまったからだと思います。私には、彼がアリサの死後もアリサの敬虔さを疑わず、妹のジュリエットと共に、アリサと名付けられた赤ちゃんを見て涙するラストは、皮肉にさえ思われました。アリサが自分の名前が付いた子をジェロームに育ててもらいたかったのは、本当は結婚してあなたと普通に暮らしたかったという無意識からのメッセージに私は、思えました。これらのことから考えると、私は、ジェロームの方が、神の徳を崇拝する気持ちが高く、アリサよりも敬虔なキリスト教徒だったと思います。そして、自分の本心に蓋をしてまで自分の尊厳を守り通したアリサがととても気の毒だと思いました。

(おわり)

『 愛をこじらせる 』

ジェロームとアリサの出会いは、理想的だった。ほぼ同時に恋に落ち、お互いの気持ちも伝わっている。ただ、アリサが周囲を巻き込んで、愛をこじらせたために思わぬ方向へと二人の愛は進んでいく。

確かに、母の不貞を目の当たりにすれば、身体的な関係を避けた精神的な高みを望む愛を求めざるを得ないと思う。しかし、それはお互いが同じ思考を持っている場合だ。ジェロームが共に一緒に過ごす「地上の愛」を望んでいたのにも関わらず、アリサはただひたすらに犠牲を伴う「天上の愛」にひた走る。ただ、私はアリサ自身がジェロームを想う自らの愛の束縛から自由になりたかったのではないかと感じる。

妹のジェロームへの思慕を利用し結婚話を進めて、ジェロームの存在をあきらめようとしたり、「狭き門」には二人は並んで入れないので、自分一人で自己犠牲と共に門をくぐろうとする。でも「聖なる心」を武器に、自らを縛るジェロームへの愛から全力で逃げているようにしか思えない。恋は、確かに自らも相手も縛る。アリサの母の姿をこの縛られた恋に重ねて恐ろしかったのだろう。しかし、愛に昇華すれば自由になれることをアリサは知らなかったのだろう。

私自身無宗教なので、キリスト教の教えは肌感覚ではわからない。でも、私からするとアリサは「帰依」という名の神への依存ではないかと思った。結局は、自らに自己犠牲を強いているようで、ジェロームを一番苦しめる。決定的な別れを告げないばかりか、死後も日記を残して、ジェロームを縛ってしまう。ジュリエットもアリサの言う通り、ジェロームと結婚していたら、アリサの依存の犠牲になっていたかもしれない。

二人が恋に落ちた時、ジェロームは「二人はもう子供ではないことを覚ったのだ」と言った。恋をするとは…大人になるということは、感情が吹き荒れて辛いことが多い。でも、それを避けていては、結局「狭き門」もくぐれない。アリサは、自己犠牲を強いて自らを守っていたことに、天上で気がつくだろうか。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「聖なる心 Sacré-Cœur」

光源氏は、中宮（父親である桐壺帝の後）である藤壺と密通し、不義の子をもうける。私は、『狭き門』を再読して、光源氏と藤壺の関係は、ジェロームとアリサの関係にそっくりだと思った。

光源氏が藤壺に思い焦がれるのは、母親である桐壺の女御の面影を彼女に中に探し求めているからだ。アリサもジェロームの母親に似ていると叔父に指摘されている。ジェロームがアリサに母の形見として渡した紫水晶の十字架の首飾りも、そのことを暗示している。

アリサは、十字架をジェロームに返し、彼の未来の娘に自分の名前をつけてほしいと頼む。アリサはジェロームなくして、神との関係に入れたいのだが、その神がいなくては、三角関係が成立しない。つまり、光源氏と藤壺、そして桐壺帝（神）の三角関係は、ジェロームとアリサと、神との三角関係にそっくりだ。藤壺の産んだ光源氏の子は、冷泉帝になり、藤壺は落飾して世俗から逃避した。

アリサが、もしカトリックだったら、ジェロームの子を産んで、その子を捨てて、修道院に入って終わりだったのだろうが、世俗主義のユグノーには、アリサを受け入れてくれる修道院は存在しない。だから現実的な選択として、彼女は、ジェロームとの思い出の品をすべて焼き尽くし、貧しい人々に献身し、出家の代わりに失踪し、野垂れ死んだ。

ジェロームから逃げることは、神からも遠ざかることである。ジェロームを通してしか、アリサは神との関係に入れなかった。ジェロームがいなければ、彼女の信仰も、抜け殻になってしまう。失恋後の彼女自身が、源氏から逃げた空蟬の残した薄衣のようである。

なぜ空蟬が、源氏から逃げおおせたのか？ 折口信夫は、源氏は神に近づこうとした人間だという。神に近づこうとする男を引き受けると、女は、神になろうとする彼のあやまちも、すべてその人生に引き受けなければならない。世俗の恋は、信仰へのジレンマを生み出す。

（おわり）

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343